



## 父が見つけてくれたもの

小林眼科医院 院長

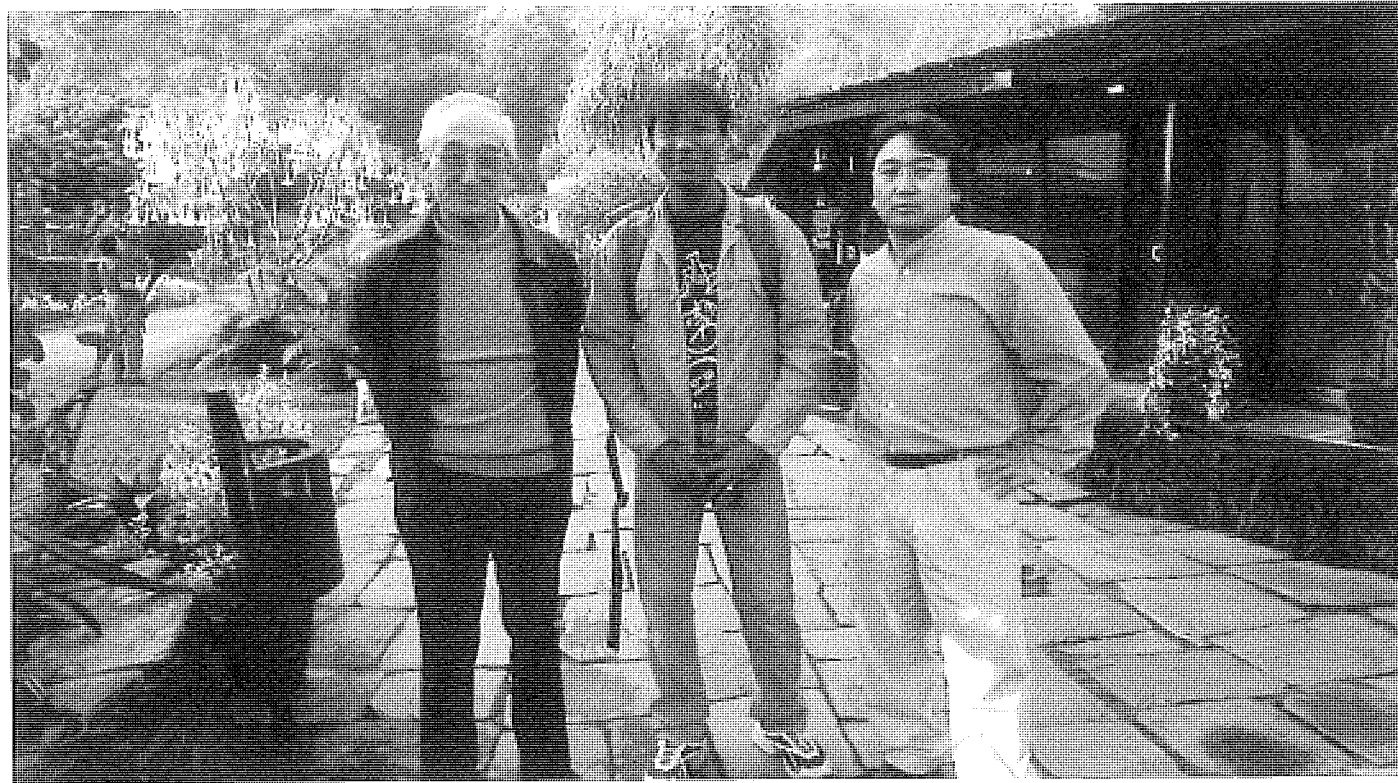
小林 真

2004年2月。あと2日で72歳のなろうとしていた父が、母と私に看取られながら静かに息を引き取ったのは、私が二度目のアイキャンプへ出発する前日のことでした。

自ら立ち上げたアイキャンプで、ネパールの患者さんを自分の手で治療したいという望みを抱きながらこの世を去りました。

ひとまわり小さくなって自宅に戻った父の遺体を前に、私は随分悩みました。このまま長男としての責務を果たさずネパールに行ってよいものなのか。手術は延期してもらうことはできるだろうか。誰か他の先生に行ってもらおうか……。

しかし。



父(小林茂バスターガバナー)とマナダール君と筆者(2000年11月・ポカラ)

生前父は、「オレに何があってもアイキャンプの予定は変えるな」と病室を訪れる度に言いました。その年のアイキャンプは、我々支援スタッフにとってとても特別な意味があったことを慮ってのことと思います。

2000年に初めてネパールを訪れて以来、一つひとつ石を積み上げるように準備をし、ようやく現地で手術をするところまで漕ぎ着け、その年のアイキャンプで最初の手術が予定されていました。

「大したもんだねえ、あんたの父親は。どうしてもお前と一緒に行きたくて出発の前の日に死んだんだよ。だから一緒に行ってきた」という母の言葉に後押しされ、諸々の事を家内、息子そして母に任せ、翌日ネパールへ向かう決心をしました。

関西空港からネパールへ向かう飛行機の中では、父を失った悲しみも寂しさも不思議と感じることはありませんでした。むしろ清々しい気持ちで、隣には父と一緒に

居るような気持ちでした。目を閉じると父と初めてネパールへ行った時のことが甦ってきました。

1998年。父は長年続いていたロータリークラブのネパール支援活動に同行し、現地を視察してきました。ネパールから帰った父は、いつもの父らしくなく、興奮した様子で「すごい!とにかくネパールはすごい国だ!」と、ネパールの人々の純朴で優しい国民性、日本人が忘れていている愛国心のすばらしさ、その一方での貧困に満ちた生活、遅れている医療、日本では考えられないような病気で失明している子供たちのことを熱く語ったのでした。父が見たネパールは、昭和30年代の、ちょうど父が鷹巣町に開業した頃と似た環境だったかもしれません。その光景が、田舎の片隅で孤軍奮闘していた若かった頃の医者魂に火を着けたのかもしれません。

当時私はネパールのことなど考えたこともなく、どこにある国なのかさえ知りませんでした。熱く語って聞かせる父にも、多分そっけない返事をしていたと思います。

そんな私に、「お前、一度ネパールに行ってみないか?」と突然言い出しました。

「ネパール?なんでオレが行くの?」

「ネパールで、簡単でいいから眼科的な治療ができないものか、お前の目で確かめてくれないか」

「ええ?それって俗に言う『アイキャンプ』っていうやつ?」「そんな本格的なものでも無いんだが、例えば子供の健診をして必要な点眼薬を渡す、とか。そんな感じの医療援助みたいなことができるものなのかどうかをさ、眼科医の眼で見てくれないか?」

「んー、まあいいけど……」

(この生半可な返事をしたばかりにこうしてこの駄文を書くハメになってしまったわけです。)

こうしてとりあえず父と一緒にネパールを訪れたのが2000年の11月でした。

首都カトマンズのトリブバン国際空港に到着し、タラップを降りた時に最初に五感を刺激したものは、ディーゼルエンジンの排気ガスと何とも言えない醜れた腐敗臭でした。そして、空港ターミナルの外に一歩出た私たちを待ち受けていたのは、真夜中というのにどこからか湧き出るように集まってくる、眼だけが異様にギラギラしている子供たちでした。その子供たちは、我々一行の荷物を運ぼうとして奪い合うように持って行こうとします。頼んでもいないのに勝手に荷物を運び、「マニーマニー、ヒャクエン、センエン!」と日本語を言いながらそばを離れないのです。

内心『えらい所へ来てしまった』と困り果てて父の方を



仲澤看護師の検査風景

見ると、『どうだ、すごいだろうネパール。参ったか?』と言わんばかりにニコニコしているのです。父がネパールの医療現状を熱く語った言葉に「よし、じゃあオレが何とかしてやるか」という、恥ずかしくなるほど軽薄な使命感だけを持ち、他に何の予備知識もなくネパールに降り立った私は、どこからともなく現れる異様な子供たちに対する恐怖にも似た感覚に、頭がクラクラしてしまいました。

こんな所で健診なんか絶対にできるはずない。早く帰りたい……。

これが私の記念すべきネパール第1日目でした。

そこへ、

「ミナサーン、コニチワ。ワタシガコンカイミナサンノ、エート、ナンダケナア、コノメンバー?ア、ア、アソソソ、ロータリークラブノミナサンデスタネ。ワタシ、『マナダール』トイマス。ミナサンオ、ガイドデス。ドーカヨロシク、オネガイシマスヨ。ワタシノナマエ、ミナサンデ、ベンキョウシテクダサイネエ。ベンキョウシテ、マナダール、アハハハ、オモシロイデスカア?チョットダケダッタネエ、ウケタ」

空港で我々一行を待っていてくれたのは、観光会社で働くマナダール君という青年でした。彼は後にアイ

キャンプはもちろん、我々の支援活動を陰で支えてくれる重要な人物となり、ネパールでは私の唯一の親友となる人でした。

翌日から一週間の視察が始まりました。首都カトマンズ市内の国立ビル病院、トリブバン教育病院などの総合病院では、医師や看護師たちの医療に対するひた向きの姿勢に接し、日頃私たちの忘れてしまったものを見つけたような気になりました。

一方、実際の現場に存在する支援活動の光と影も同時に目の当たりにすることになりました。

さすが国立病院だけあって、エコーも心電計も内視鏡も透視機も、医療機器のほとんどが揃っていますねえ、と感心していると、案内役のドクターが、「この病院には日本、アメリカ、ドイツ、オランダのドネーションでたくさんの器械を入れてもらい感謝しています」と言いながら奥の部屋に招き入れてくれました。そこには数台のまだ新しい医療機器が放置されていました。「これはみんな壊れています。私たちはこれを修理できません。」と悲しそうな笑みを浮かべて彼は言いました。

これが支援の影の部分です。物を与え、後はそれ切り……。

カトマンズ市内をひと通り視察した後、私たちは国内線でネパール南部の町、バイラワへ移動しました。バイラワからインド国境まではほんの数キロしかなく、釈迦の生誕地であるルンビニが近くにあります。

バイラワからバスで北上しながら地方の医療施設や、郡立病院、看護学校などを視察しました。

このバイラワでは面白い場面に遭遇しました。ガイドのマナダール君が、「センセイ、イマネ、オモシロイヒトイタヨ。キトーシノオジイサン。ナンカ、ウデ、イイラシイヨ、ソノオジイサン」と、その祈祷師の家に行こうということになりました。

ネパールでは医師が少ないので、病気になるとまず祈祷師が呼ばれ、お祈りを捧げ「治療」に当たります。ネパールの医師数は全人口2600万人に対し5000人足らずで、人口5000人に一人の割合しかおらず、これは秋田県のほぼ10分の1です。

町の中心部なのに街灯もなく、月明かりを頼りに真っ暗な道を祈祷師の家へ向かいました。

マナダール君が中へ入り、日本から医師たちがやって来てあなたたちに会いに来た、と伝え、大変喜び、件の祈祷師のおじいさんが出てきました。まったく普通のおじいさんです。お坊さんのような特殊なコスチュームを着ているでもなく、特別な道具を持っているでもない、

いたって普通の、その辺で日向ぼっこをしていそうなおじいさんでした。

そのおじいさん、さっきまで子供の治療をしていたと言いました。

マナダール君曰く、「コノヒトネエ、コドモセンモンノキトーシ、ラシイヨ」

はあー、祈祷師にも専門があるんだ！このおじいさんは『小児科』か！と一同驚きました。で、どうやって治療するの？

「ネツノコドモ、ダツトラシヨ、サッキノコドモ。エ？ドウヤルカッテ？」

ネパール語で何やら取りして、「アノネエ、ナンカ、オデコニ、ソルト、ソウ、シオ、スリコムダッテ。ソシテ、ビスケットミタイナ、アマイオカシタベサセテ、ミズ、ノマセル」

「それで終わり？」

「ソウミタイ。ソレカラ、オイノリ」

「……」

「スグー、ウデイイラシイヨ」

塩で発汗を促し、ビスケットで糖分、そして水分補給か？？？

当時のネパール政府は、このおじいさんのような、地元住民から信頼され、暮らしに密着して『医療行為のようなもの』を行っているいわゆる祈祷師に、西洋医学の基礎を教え、地元住民の健康管理に役立てようとしています。

計り知れない国ネパール。恐るべしネパール。

バイラワで『小児科』の祈祷師の技に度肝を抜かれた私たちは、昨夜の興奮も冷めやらぬまま、翌朝ネパールのほぼ中心部に位置する景勝地ポカラを目指しマイクロバスで出発しました。ポカラまでは6時間。途中毎年何台かのバスが谷底に転落するという峠道を通り、ポカラのホテルに到着した時には皆へトへトでした。

ポカラは当時の王室の別荘がある、ネパール有数の観光地です。ペワ湖の水面に映る6千メートルを超える『マチャプチャレ』は、ネパールで眺めることができる山々の中でもエベレストと並び有名です。

私たちが到着した時はあいにく雲に覆われて、その美しい姿を望むことはできませんでしたが、カトマンズとは違い、すがすがしい空気と湖畔でのんびり釣りをする人、サイクリングを楽しむ外国人観光客、ハンモックで昼寝をする人など、まさにリゾート地でした。

私たちは休息もつかの間、近所にある郡立病院とその付属看護学校の見学に向かいました。事前のアポイントメント無しでお邪魔したにも関わらず、快く迎えてくれた

スタッフは、院内とその病院が担っている地域医療圏について説明してくれました。

ポカラは前述のようにネパールのほぼ中央に位置しますが、この病院は主にネパール西部と北部山岳地域の住民を対象とした診療を行っているようです。しかし、大きな病院にも関わらず殺風景で、医師と見受けられるスタッフもほとんどいない状態でした。医師の絶対数が少ないネパールでは、地方都市の病院に十分な医師を配置できずにいることがよく理解できました。後になって知ったことですが、このポカラ周辺の山岳地帯にはアメリカ、カナダを中心に、各国の医療キャンプが入っており、医療をまったく受けられない、受けたことがない住民のために支援活動が盛んに行われています。

その晩、湖畔のホテルで長かった一日の疲れを癒しながら、私は貴重な話を聞くことになりました。

私がネパールを訪れる10年以上も前から、ロータリークラブの活動と共にさまざまなコーディネーター役を務め、毎年このネパール支援を支えてきた秋田赤十字病院の佐藤正氏は、私にとっては言わば『ネパール学部』の教授であり、『師匠』です。ネパールの文化、生活、医療システムに精通し、その風貌もどちらかというとならぬ風な師匠は、秋田日赤が1983年から始めたネパール保健医療従事者の招聘と技術指導活動に初期の頃より携わり、ネパール人看護師からの信頼も厚い、私たちの活動の軸です。

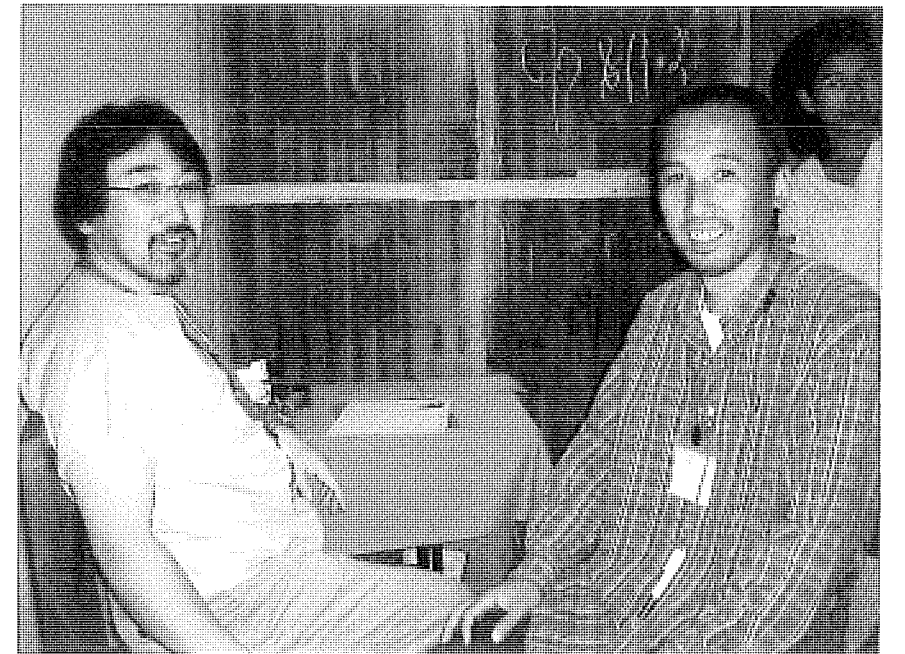
ビールで少し顔を赤らめながら師匠曰く、「まっこ(氏は小生をこう呼ぶ)、ネパールさポランティア団体って世界中から来るべ。年間何ほくらい来るが判るが？」

「千くらい？」

「千？ナモナモ、もっとだんす。何と、1万5千団体入るのス」

「1万5千！？」

「んだす。1万5千。だども、この9割が一回ぼっきりの単発援助なのス。んだから、ほれ、この間カトマンズの国立病院見に行ったすべ、あそこの病院さぶっ壊れだ器械いっぱいあったすべ。粗大ごみ。直せないものを置かれて行っても困るわけだすなあ。残りの1割のボランティア団体は二回三回と継続して入ってくるわけだんすけど、これ、大変なことなんだども、ネパールの人に



師匠(佐藤日赤事務副部長)と筆者:ハヌマンカルカ

とって一番ありがたいことなんだすなあ。んだから、ロータリーと日赤のやっている看護師養成はもう20年続いてるわけだから、こりゃあすばらしいことだなあ。』

『ですなあ。そしたら眼科的な支援ってこの先どういう形でやったらいいすかねえ？』

『んだすなあ、どうやったら良いもんだすべなあ。規模を大きくしないでゆっくり時間かけてやるすべ』

『オレはさあ、こっちに来たらすぐ診察して、具合悪い人はすぐ手術して、って思ってたけど、どう考えても無理だもんねえ。』

『んだすなあ。大抵の人はネパールのような国に来れば、救うのは俺だ！って、カアアって熱くなって、ワーってかき回してハイさよなら、だすべ。これは無礼なことだすものなあ』

『はい。私もその部類でした』

『いやいや、まっこはすぐそれに気がついたから大丈夫だべ。オラも眼科的な医療支援は必要だと思ってたところだから、腰据えて計画練ってみるすべ』

『ハイ、師匠』

『師匠？』

『んだす。佐藤さん今日から私の師匠だす』

『へば、乾杯だすなあ』

と何杯目かのビールでお互いすっかり良い気分でした。傍らで父は、チャイと呼ばれるネパールのミルクティを啜りながら、意気投合した我々二人をにこやかに見守っているかのようでした。

初めて父と訪れたこの年のネパールが、父にとっては最後のネパールとなってしまいました。



ビールで師匠とかための杯が交わされて2年後、2002年11月。

私たちはカトマンズの東南、車で3時間の所にある、カブレ郡ハヌマンカルカ、パタリケート村の小中学校のグラウンドに立っていました。グラウンドからはヒマラヤの山並みが雲のように浮かんで見えます。

抜けるような青空の下、初めてのアイキャンプが始まるようになっていましたが、残念ながら体調不良の父はその場にはいませんでした。この年の夏、私たち家族には、父は余命2年であると知らされていました。

私たちの目の前には大勢の患者さんが集まっています。緊張感漂う一瞬でしたが、師匠と目が合うと、『まっこ、へば始めるべ』と満面の笑みを浮かべた師匠が言いました。

パタリケート村の学校に集まった患者さんは総勢300人あまりでした。そのほとんどが初めて眼科医、それどころか医者というものを初めて見たという人でした。

日本で何度も話し合い、シミュレーションしたとおりの段取りで診療の流れを組み立てていきます。

まず患者の受付。秋田日赤で研修経験のある現地看護師が名前、生年月日、住所を聞いてカルテに記載します。その後日本のスタッフがボラロイドカメラで顔写真を撮影してカルテに貼り付けます。これは、我々にとって彼らネパール人の顔は、特に老人は皆同じ顔に見えるので、個人識別を慎重に行うためのアイデアです。この顔写真撮影をする時に、自分の写っている写真をくれという人が多くて困りました。彼らは自分自身の写真を持っていないのです。

受付の後視力の検査をします。これがまた一苦勞です。『視力』の概念が無い人に視力検査をするというのは非常に難しいものです。そこで、我々は普段外来で幼児や精神発達遅滞の患者さんに行っている方法で行うことにしました。大きなランドルト環（視力検査で使用する輪）を画いたボードを持たせて、検査表のランドルト環の輪の切れ目の方向を真似てもらおう方法です。

視標の大きな方から小さな方へ見てもらいますが、検査の順番を待っている後ろの人がやたら茶々を入れます。「なんだ、お前あれ見えないのか？ありゃあ上だ。」彼らにとってはクイズでもやっているつもりなのでしょう。まったく検査になりません。どれを見せても『真ん中』と答える人(そりゃあそうです。ランドルト環は全部真ん中が空いてます)や、「どうして左右別々に検査するのか？オレはいつも両目で見てるよ」と、まあ、一応筋の通っている文句を言う人、様々です。こんな患者さんをうまく

誘導したり、視力検査を手伝ってくれた学校の先生や地元のボランティアの方たちには大変助かりました。

どうにか視力検査をクリアした患者さんは、いよいよ私のところへやって来ます。私の診察介助をしてくれるのは、やはり秋田日赤で研修を受け、私のクリニックでも眼科研修を受けた看護師です。彼女が患者さんにネパール語で尋ね、それを英語か日本語で私に伝えます。そして、病状や診断、指示を英語で彼女に伝え、それを患者さんにネパール語で伝えるという、実にスムーズな診療を行うことができました。



手術後の患者さんと筆者

患者さんのほとんどが老人で、白内障、翼状片で視力低下を来していました。また、小児では遠視による屈折性弱視、先天性白内障、外傷の後遺症がみられました。想像していたトラコーマなどの日本ではあまりお目にかかれない感染症にはあまり遭遇しませんでした。

2002年に行われたアイキャンプでは、患者さんの診察のみとし、翌年のアイキャンプで手術をするべく、手術が必要な白内障の患者さんを選定することにしました。

白内障手術では、濁った水晶体を摘出し、変わりに人口の眼内レンズを挿入しますが、眼内レンズにもメガネと同様その人に適した度数があります。その度数計算に最低限必要な持ち運びできる計測機器を持参し、現地で手術が必要と判断された患者さんを計測することにしました。

ところが、器械を動かす電気がない。いや、幸いにもその村には電気はあるのです。でも安定供給ができないため、ついでには消えの繰り返しで、バッテリーは消耗し、満足のいくデータは取れませんでした。結局、翌年に再度検査し直すことにしましたが、今後の課題として電力の確保が問題となりました。

こうして、エンストを起こしながら峠の山道を登っていくオンボロボスの如く始まった我々のアイキャンプは、2002年から今年2010年2月までに計9回、6か所の村で行われ、受診者数は1948名、白内障手術件数は59件となりました。

白内障手術は、当初次年度の手術患者さんを選定し、1年間待ってもらった後手術するというスタイルをとっていましたが、5年前からはその年に手術を終えるようにしましたので、患者さんを長い間待たせることがなくなりました。

白内障患者に使用する眼内レンズは、大館市医師団、鷹巣医師団、そして当院の外来に設置している『ネパール募金』への通院患者さんの善意によって賄われました。日本の患者さんが差し伸べた手によって、ネパールの患者さんが再び光を取り戻せるようになったことは感慨無量でした。

今後は、私たちの行っている今のアイキャンプの形態を崩さず、大掛かりなアイキャンプを行っている他の団体が入れない地域で、小回りの利く機動力を活かし地道に続けていこうと考えています。

つい最近、長い間続いてきた王政が終わりを告げ、新しい国として再スタートを切るネパールですが、蟻ほどの力もない私たちの活動が、新しいネパールのほんの一握りの患者さんの命や視力のために役立てられれば幸いと考えています。

我々の医療支援は、我々だけの力だけでは成し得ません。いろいろな人の形を変えた、見えない間接的な陰のボランティアの存在に感謝します。そして、私のライフワークを見つけてくれた父にも。

#### 〈エピローグ的なこと〉

その患者さんは、見るからに疲れ切った顔つきで私の前に現れました。歩き方や視線の泳ぎ方で、これは相当視力が悪いと感じました。年齢は36歳。女性です。数週間前より視力が落ちてきて、今ではほとんど見えないと訴えました。視力検査では両眼とも0.02くらい。眼圧正常、前眼部、中間透光体には異常なく、看護師が測定した血圧にも問題ありませんでした。眼底を観ると、両側の視神経乳頭に浮腫があり、頭蓋内の異常を疑いました。

以前、他の村でまったく同じようなケースを経験しました。その時はすぐカトマンズ市内の国立病院へ行き、脳腫瘍が発見され手術してもらうことができました。親せき一同、隣近所からお金をかき集め病院へ行ったそうです。



父・ボカラで

今回の場合、事情がまったく違いました。

あなたの頭の中には何か悪いもの、あるいは悪くなくてもそれを取り除かなければ失明の危険や命に関わるものがあるかも知れないから、すぐ大きな病院へ行ったほうが良い、と当たり前の説明を本人と家族に告げました。ところが、病院には行けない、お金が無いから行けない、お金を都合つけられる親せきもいない、なんとかしてくれと泣くばかりでしたが、無論我々にもその力はありません。彼女と家族は肩を落として帰って行きました。

アイキャンプを行って初めて虚しさを感じた瞬間でした。例えば病気があっても知らずにいた方が幸せだったのではないかと事実を伝えたために、この先いつ急変するかもしれない爆弾を抱えながら、恐怖と不安に満ちた暮らしを続けていかなければならない彼女とその家族。これで良かったのかなあ？親父、どう思う？

そんなことを思いながら師匠と見上げた夜空には、いつもと同じ満天の星が無数の光を放っていたわけで……。



診察する筆者